京新聞 (第3種郵便物認可)

こちら特報部

自助頼み「日本の縮図」

障害者向け対策示さず

消毒液などの供給なし

厚労省

昨年十月、けやきの郷を台風19号が襲った。同十二日夜、施設のすぐ脇を流れる越辺川が増水し、堤防が決壊。施設は濁流にのまれた。水の高さは三メートルに迫り、家具や器材は泥まみれになった。

入所者の多くは事前に自宅や避難所に移っていたが、強い行動障害がある五人は職員と一緒に安全と思われていたグループホームに退避し、孤立した。翌朝、消防隊に救助された。

入所者らは、集団で避難生活することはできなかった。生活の場を失った入所者たちは、親元や避難所、他の施設へと分散した。環境になじめずスタッフにかみついたり、建物の二階から飛び降りようとしたりと、トラブルが相次いだ。新築移転は市との協議がまとまらずに断念した。

あきらめず、同じ場所での復旧を目指したのは「全国からの励ましがあった」(阿部さん)からだった。泥だらけになった施設の片付けには学生や他の障害者施設関係者ら、千人のボランティアが駆けつけた。義援金を届けてくれた施設の人もいた。

一方で阿部さんは「水害は人災だった」と言う。そもそも、なぜ川の近くに施設があったのか。先駆的な取り組みだっただけに、建設を世間から反対された。けやきの郷の歩みを振り返ると、そんないきさつが浮かんでくる。

けやきの郷は一九八五年に設立された、全国で二番目、東日本では初めての自閉症の専門施設だった。

自閉症は「対人関係やコミュニケーションが難しい」「興味やこだわりが強い」などの特徴があるとされる。近年は自閉症の作家、東田直樹さんの著書「自閉症の僕が跳びはねる理由」などで知る人が増えた。だが、当時はほとんど理解されていなかった。

義務教育を終えても、重い知的障害と行動障害がある自閉症の人を受け入れる場はほぼなかった。阿部さんの長男太郎さん(五七)も自閉症。義務教育さえまともに受けられなかった。

そんな状況を変えようと七九年、阿部さんらが施設の建設運動を始めた。すると「障害者施設ができると地価が下がる」と地元で猛反対が起きた。計画地を転々としながら約七年かかってようやく開所した。それが今の場所。民家から離れた川のそばだった。

市の水害ハザードマップを見ると、施設は危険地帯にすっぽり入る。九九年夏の豪雨でも水害に遭った。だから、阿部さんは「ケアを必要とする人の施設を危険な所に建てることを行政が認めたことが被害の根本にある」と指摘する。

その冷たさを、阿部さんは今も感じている。施設は台風被害を乗り越え、四月に全面再開するはずだった。そこに新型コロナが立ちはだかった。

厚生労働省はいくつもの通達を出した。それを読んだ阿部さんは、障害者施設への対応を冷たいと感じた。「感染発生に備えて人員確保しなさいとはいっても、障害の特性に合った対策は示されない。これって自助に偏る日本の縮図じゃないでしょうか。防護服も消毒液も送ってはくれない。人の命を守るという点では医療と同じ、投げ出せない仕事なのに」

施設は差別や偏見の中から出発し、ようやく、各地から支援が集まるところまでこぎ着けた。伊得さんは「再び自閉症者への差別や偏見が助長されないか」と、新型コロナで流れが逆行しないか心配する。

そして伊得さんは「社会が困難になると人々の不安や鬱屈した感情はより弱者に向けられがちになる。そうならないよう、私たちはコロナ終息後を見すえて闘っていく。真の共生社会を実現するために」と続けた。

昨秋の水害の後、泥かきや家具の運び出しを手伝う各地からのボランティア

35年苦闘の運営 再び自閉症者への差別助長 懸念

デスクメモ

施設への猛反対の話で思った。老人ホーム、児童養護施設、軽費宿泊所。最近は保育園も嫌な顔をされる。それは差別であり、偏見だと分かっている。だが、いざ自宅近くになったらどうか。正直なところ、いろいろな考えがよぎるだろう。自分の小ささを自覚し、正していきたい。(裕)

2020・5・10